

現代の健康法にも役立つ杖道

日本剣道連盟杖道教士七段

自在庵道場主 酒井 幸宏

経 歴:1933年生まれ土浦市大畑出身
1971年:株式会社ピーターパン設立、
現 代表取締役会長
2010年:有限会社つくばチョウザメ産業設立、
現 代表取締役会長

1. 杖道とは

杖道は、慶長年間に真壁出身の夢想権之助^{むそうこんのすけ}によって創始されました。剣の達人であった権之助は、全国を試合して回り負けることはありませんでした。しかし、宮本武蔵との試合で敗れ、その後、研究を重ね杖術を発明し、再度武蔵と試合をして、ついに互角に勝負したと伝えられています。

武術は、通常、弓、槍、剣、薙刀^{なぎなた}など殺傷を目的としているのに対し、杖道は、唯一相手を傷つけず身の安全を守る武術です。杖道は、合気道、柔道と並び武器を使用する競技として、現代に最も適している日本古来の武道だといえます。

2. 杖道の効能について

道歌に、〈突けば槍 払えば薙刀 持たば太刀 杖はかくにも 外れざりけり〉とあるように多彩な技を持ち、〈傷つけず 人をこらして戒むる 教えは杖の外にやはある〉といわれている様に、身体を柔らかく多様に使うため全身運動に適しています。その上、形武道であるため安全で、稽古着も防具も使用しないため簡便で費用も少なく、健康法としても適しております。

3. 歴史と現状

江戸時代の初めに創始された杖術は、元祖夢想権之助が福岡の宝満山にて祈願参籠して開眼しました。そのため、黒田藩に採用され明治維新まで藩の御留武道として、主に藩の捕り方に傳承され、「黒田の杖」と恐れられたといわれています。

明治維新後、藩が取り潰されたため急速に衰退しましたが、高弟の清水隆次氏が東京に出て普及を志し、昭和15年に大日本杖道会が生まれ、昭和31年に日本杖道連盟と改称、昭和43年まで活発に活動しました。

昭和43年に、日本剣道連盟に杖道形が制定さ

れて以降、神道夢想流を学ぶ者は全員全日本剣道連盟に所属し、連盟から段位を取得することになりました。

これまで棒術にはたくさんの流派がありましたが、連盟の指定形十二本は、ほとんどの形を夢想流より採用しております。

現在は、上達した稽古者には古流を学ぶことを希望する者が多いため、特別に指導をしております。制定形が十二本に対して、古流の夢想流杖術は多彩な技より成り立っており、身体の使い方も特殊で難解ですが、研究するほど面白くなり、はまり込んでいきます。

形は、表十二本、中段十二本、影十二本、五月雨六本、仕合口十二本、極意五本など合計六十四本とされています。数が多く難解なので、全国でも免許皆傳承者は数人しかおりません。しかし、杖は多彩な技があり、入り込むと面白く興味を惹かれるため、一生を懸けて学びたいものなのです。

全国で重点的に普及しているのは福岡ですが、東京も第二の重点地といえます。最近では、北海道を始め全国的に普及して参りましたが、茨城でも20年程前より普及し始め、始祖の地であることから普及にも力が入り、我が道場「自在庵」が中心になって、日々稽古に励んでいます。



■「自在庵」での稽古の様子

辛い努力の甲斐あって全国大会でも優勝者を出し続けており、高段者に属する六段でも優勝しました。今後も益々普及していくことと期待しております。

また、一般のスポーツと違い、日本武道は江戸時代以降、治世上の必要から道徳と礼を重んじる思想が加わり、技だけでなく人間形成上の重要な部分としての役割も期待されております。

その上、平成24年4月から中学校で武道が必修化されることにより、一挙に普及に拍車がかかりますことになりました。

今までも名実学園などは剣道に力を入れて参りましたが、夏場、防具を着けての稽古は女子生徒からあまり評判が良くありませんでした。そこで杖道を取り入れたところ評判が良く、毎年数十名の有段者を輩出することになりました。

杖道の修行者には学校の先生方が多数おりますので、この傾向は益々広がっていくものと期待しております。

4. 伝承の仕組み

古流においては、免許者が弟子たちの中から上達の程度を判定し、四段階で証書が授受されます。順序は、1.奥入証、2.初目録、3.後目録、4.免許です。そして判定授受においては公開されることはありません。

剣道連盟の杖道においては、剣道と同じように段位制をとっており、一級より始まり初段から八段まであり、昇段については技術と修行年数が加味されます。段位ごとに1年、2年、3年と段毎に受験資格の年数が増え、特に七段から八段への挑戦には、10年の年月が必要となります。しかも1回で通過する保証も無く、人によっては4回ないし5回かかる人もいます。

試験においては、六段以上の審査員が5名以上並んで審査し、合格者を決定します。五段までは各県で実施され、六段以上は全国規模で行われており、全て公開されています。

5. 形の名称について

剣道については、面、胴、小手、突き、で表され古流の形の難解な表現が用いられておりません。杖道においては、着杖、水月、引堤、斜面、左貫、物見、霞、太刀落、雷打、正眼、乱留、乱合、と見れば分かるような具体的な表現となっており、名称も古流以来の表現をそのまま使っております。

6. 私にとっての杖道

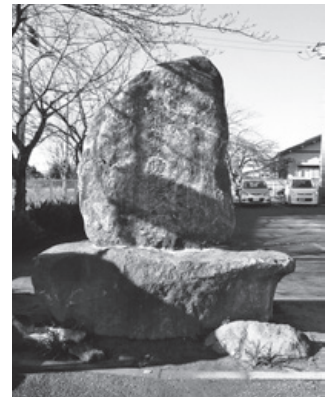
もともと私の家には刀などがたくさんあり、興味を持っておりました。高校時代は柔道、社会人になっても剣道などを少しやっておりましたが、不摂生な生活から40代に糖尿病、痛風を発症し、医師から運動を禁止されました。症状が進み、50代に入ると痛風の発作が頻繁に起こり、1ヶ月の半分は床に着く生活になりました。

「これでは生きている価値が無い」と苦しんでいる時に、新聞の記事で杖道を知りました。身体全体をくまなく使う割には、あまりハードな使い方せず、老人にも取り組みそうなので試しに入門して練習を始めたところ、あれほど苦しんでいた痛風の発作がびたりと止まりました。「こんな素晴らしい武道はほかに無い」と、私はすっかり杖道の虜になり、今日まで来ました。

この過程において、流祖が茨城の真壁出身と知り、私は、故郷の地に定着させようと道場を作り、仲間を呼びかけて活動しています。

幸いたくさんの仲間に恵まれ、昨年には桜川市の後援もいただき、市内にある真壁庁舎の敷地内に夢想権之助の顕彰記念碑を建てることができました。

私は小さいながら商売をして生活しておりますので、杖道は社会奉仕の一環として、参加者には無料で道場を開放しております。利用者の中には、女性や外国人の会員もたくさんおり、帰国後に祖国で普及に取り組んでいる方もおり、海外旅行の際に立ち寄るのが私の楽しみの1つとなっております。私は今後も生ある限り、杖道に取り組んでまいります。



■夢想権之助の顕彰記念碑



■外国人の修行者の稽古の様子

■この「つくばのシニア人材紹介コーナー」は、つくば市が2008年度から推進している「つくば市OB人材活動支援事業」に登録されている研究者・教育者の方々より寄稿を受けて作成しています。現役を一旦引退されてもいつまでも社会発展の牽引力となって活躍をされている方々の研究実績や業務経験の一端をご紹介させていただくものです。